

十二世紀の治水・利水と地域社会

川 端 泰 幸

はじめに

日本の古代末から中世前期にかけて形成された荘園は、列島中世の経済的・社会的基盤をなした。荘園とは、天皇家や貴族、大規模寺社などのいわゆる「権門」の経済を支えるために各地に設定されたものであるが、単なる経済システムに止まるものではなく、社会のあらゆる方面において多大な影響を与えたものでもある。とりわけ、地域社会のあり方に与えた規定は大きい。例えば、荘園領主が大寺社であれば、各寺社が祀るところの仏神が荘園に勧請され、その地の鎮守として定着する事例が多く確認できる。鎮守の境内では、祭祀や年中行事が行われるとともに、荘園住民たちの寄合による村落の意思決定がなされた。つまり、荘園という領域における鎮守仏神を媒介とする独自の地域秩序が生み出されたのである。また領主に納入する年貢を生産する荘園は、農耕・再生産を行う一つの共同体でもある。用水を共有し、再生産活動を維持していく中で荘園は権門領主が設定した収取の枠組みを越え、領域性を持つ新たな地域社会に転生するのである。これらのことから、荘園制が単純な制度やシステムに止まらないことは明らかであろう。

本稿では共同体としての荘園ということを前提に、荘園に生きた人々がどのような問題に直面したのか、また荘園と

いう枠組みが中世の社会秩序に与えた規定がいかなるものであったのかという点について検討を加えたい。その際、特に荘園が再生産の場であるということを重視し、再生産活動の維持を左右する治水・利水など、水に関わる側面からこの問題に取り組むこととする。そこには、灌漑・開発の問題、水災害の影響やそれへの対応などが課題として含まれよう。こうした問題関心と関わる研究としては、寶月圭吾氏による灌漑史の包括的な研究¹や、黒田日出男氏による開発史研究²、などに代表される多くの成果が蓄積されている。また木村茂光氏は戸田芳実氏の提唱した古代末から中世前期にかけての時期を「大開墾の時代」と捉える立場から、在地領主・村落農民双方の協同による開発のあり方を明らかにしている³。かかる先行研究の成果に学びつつ、中世初期にあたる十二世紀段階における治水・利水と荘園との関わりについて見ていく。

第一章 洪水と地域社会

第一節 伊勢国大国荘と保安二年洪水

保安二年（一一二二）八月、伊勢国を中心とする近隣地域において台風による大雨が降り、伊勢の豊受神宮（外宮）も社殿が浸水するなどの被害を受けた⁴。この時、大規模な被害を蒙ったのが、伊勢国多気・飯野両郡にまたがって所在する東寺領荘園の大国荘であった。大国荘は伊勢国の中部を伊勢湾に向かって流れる大河＝櫛田川の流域に位置する荘園である。この地域での洪水は八月二十五日に発生し、大国荘域は土砂に埋もれた。その被害状況と復興への取組みがいかなるものであったのかを確認しておきたい。この問題についてはすでに大山喬平氏による復興費用に関する言及⁵や、水野章二氏による災害史の視点からの研究があるが、ここでは水害という事態が荘園の空間および住人にもたらしたものと、水害を契機に生み出されたものという視点からあらためて見直してみる。

大国御庄注進為_二去八月廿五日洪水、且流失、且砂埋田畠損亡子細狀、

一御庄内麻生會村田一町、桑畠四段、

一大井川原片畠二町 已白川原

一兄国川原同畠一町五段 之中五段桑畠 已白川原

一大川原畠三町一反半 之中一反半桑畠 已白川原

一大国村田三町八段半、畠一町一段 之中五段桑畠 已損

一横道村田八町四段半、桑畠二町二段三百歩、

一御正作田一町荳類稻伍佰束、雖_レ納_二御倉_一湿朽如_レ藁、

一流失在家七家、道房・友行・守次・□末・得重・公元・頼清、

一流死女一人、同斃死牛馬十疋 之中馬二疋・牛八頭、

右件田畠、或崩失或流失、或土高二三尺許置埋、或砂石流居、成_二白川原_一、永所_二損亡_一也、抑_レ纔_レ所_二流殘_一田、往古之堰溝流失、難_二□後□不_レ可_二耕作_一者、加之、他所權門勢家神社仏寺庄園領田為_二耕作_一、從_二當御庄之中_一、彼流失之堰溝、任_二先例_一可_二堀通_一之由令_レ然、則擬_レ令_二堀損_一之处、田畠假令_二二三町許也_一、是為_二後日之訴_一、兼日所_二言上_一也、如_レ此之間、田畠殘非_レ幾歟、但実檢使下向之尅、無_二其隱_一哉、仍任_二実正_一、法進_{（注カ）}如_レ件、

保安二年九月廿三日 御庄專当藤井時光

同 專当菅原武道

檢 使凡友永（花押）

押領使本塩房（花押）

田堵住人等

伊勢恒正（略押）

清原光成（略押）

太神宮権禰宜荒木田豊平

豊受太神宮権内人大和武次（花押）

太神宮大内人荒木田豊元

凡 友平（花押）

僧 定照（花押）

太神宮司 卜部正光（花押）

現地の有力者である田堵住人らを中心とする人々が領主である東寺に提出した右の文書によれば、田地一四町三反、畠地一〇町四反一二〇歩、そして在家七軒が流失した。また、女性一名、牛馬一〇頭が洪水に吞まれて死亡したとされる。田畠については、流失のほか洪水で押し流されてきた土砂が二、三尺も堆積し、同じく流れてきた砂利によって、河原と化してしまったようである。これより少し後の大治元年（一二六〇）段階における大国荘の得田（収獲可能な田地）数が三四町五反二〇〇歩であるので、田地だけを見ても四割以上が失われてしまったことが分かる。この事態に対し積極的に復興への動きを見せたのは、荘園領主である東寺ではなく、現地で農業経営に携わる田堵住人らである。彼らは当然のことながら現地の再生産に通暁しており、即時に損害規模の確認・報告を行っているのである。また、ここでは田堵住人以外に荘園経営の実務に携わる専当や押領使、当地域に経営を展開している伊勢神宮の神官らが名を連ねている。こうした人々の結合は、まさに日常の再生産活動および、洪水のような非常時の災害対応という活動の中で形成されていったのであろう。そして、彼らが復興に向けて第一に取り組もうとしたのは流失した堰溝の復旧であった。

大国御庄田堵等解 申請 本家政所裁事

請_レ被_下殊任_二傍例_一、宛_二給堰料_一、改堀_二顛堰溝_一、令_レ耕_二作去年八月廿五日洪水損失残庄田_一子細愁状、

右田堵等、謹檢_二案内_一、田地耕作之道、為_レ先_二堰溝之中_一、当御庄本自田數狭少之上、散_二在大河之左右_一、相_二交神領之堺内_一、彼是共所_レ勤_二仕其役_一也、然間動雖_レ遇_二水損_一、於_二堰溝少破之時_一者、乍_レ歎不_レ言_二上本家_一、田堵致_二修固之勤_一、至_二于去年洪水_一者、滿_二溢部内_一、山岳頽落如_二平地_一、田畠作物流失、成_二河底_一、人馬舍宅多以流失之間、狭少御庄田所_レ残不_レ幾、抑謂_レ堰者堤_二寒所謂櫛田河_一之名也、件河広五十餘丈也、此中御庄分及_二廿丈_一也、於_二此外_一者、傍庄庄之勤也、又埋損本溝七八町頽失之替、可_レ改堀_二之溝廿餘町也、件溝広二丈餘深一丈六尺許也、推_二其人夫并食物_一、敢不_レ可_二勝計_一、而乏少御庄之内、多成_二河河原_一、永不_レ可_二耕作之間_一、其田堵闕乏之故、弥人數不足、不_レ及_二私力_一、僅所_レ残埋田無_二堰溝_一者、以_レ何可_二堀作_一哉、凡非_二当庄_一、已傍庄園并神領田地等、皆以一同之間、領主等或宛_二給人夫食物_一、各田堵相共令_レ勤_二彼堰溝之役_一、或免_二除所当之年貢_一、令_レ募_二彼堰溝料_一者也、是國內古今、去年洪水無双之上、為_レ在_二将来年貢之弁_一也、件堰溝顛倒之条、田堵等若構_二申無実_一者、忝可_レ被_二裁罰_一仏神_一也、可_レ遣_二実檢使_一之由、頻雖_レ令_二言上_一、不_レ被_二下遣_一之間、重所_二訴申_一也、不_レ被_二裁許_一者、以_二何術_一耕_二作一步田地_一、誰人可_レ留_二跡庄内_一哉、御庄已以可_二荒廢_一者也、仍種蒔之期近近之間、早為_レ被_二裁許_一、言上如_レ件、望請 政所裁、任_二傍例_一、依_二道理_一被_レ宛_二彼役料_一者、将仰_二正理之貴_一、尚致_二耕作之營_一矣、今勒_二事状_一、以解、

保安三年正月廿八日堰長外宮内人大和「武次」

藤井「行永」

藤井「枝垣」

大和「真元」

田口「友次」

藤井「守岡」

太神宮御蘭別当大中臣「吉末」

太神宮司占部卜部「正元」

太神宮大内人荒木田「豊元」

同宮松本御蘭司散位伊岐「奉綱」

豊受太神宮権禰宜度会「彦平」¹⁰

この史料は、復興の第一歩として、大国の田堵らが堰溝を修復するため、その費用給付を東寺に求めたものである。田堵らの主張で注目すべきは「田地耕作之道、為_レ先_二堰溝之中_一」として、農耕の第一が堰溝の構築であると理解している点である。農耕を「道」として位置づけ、その活動の根本とも言うべきものを打ち出すところに、地域社会における農業経営のプロフェッショナルとしての性格を窺い知ることができる。また、田堵らによれば、これまでは堰溝も「少破」であれば、歎きながらも自分たちの手で修復（修固）してきたが、去年の大洪水はあまりにも大規模であり、自力では修復が不可能であるという。それゆえ、今回に関しては「堰料」（堰溝構築費用）を荘園領主から給付してほしいと依頼しているのである。この時、計画された堰溝の規模は、長さ二〇余町（約2km）、幅二丈余（約7m）、深さ一丈六尺（約6m）というものであり、大規模工事であったことが窺える。¹¹

この事態に領主である東寺はあまり積極的に対応しなかったようで、被害規模検分のための実検使下向を願った田堵らの要請が年を明けたこの時期になっても未だに実現しておらず、この文書が出されたのである。そのような事情を背景に持つこの文書には、田堵らが領主東寺を動かすための巧みな論理がちりばめられている。まず、大国荘の立地について言及がある。大国荘が櫛田川の左右に散在して存在する、いわゆる散在型荘園であって、これまでは領主を煩わ

せず境界を接する伊勢神宮領莊園などとともに自力で用水の補修・保全を行ってきたこと。すなわち、今回の要望は決して恒常的なものではなく、あくまで予想外の緊急事態に対する非常措置であることを説いているのである。その上で、近傍の諸莊園では、すでに領主から復興のための食物や人夫の給付、あるいは年貢納入の減免措置などがとられていることを挙げ、自分たちにも同様の対応をするように、懇懇にはあるが強く迫っている。ここから、田堵らの高度な交渉論理の存在と、用水を媒介とした近隣莊園（領主を異にする）との日常的な合力関係が定着していることを読み取ることができよう。

この保安二年洪水は、隣国伊賀国名張郡の山間に位置する東大寺領莊園黒田柚にも被害をもたらしていた。当地の柚司が相論（裁判）の過程で提出した文書に「就中依去保安二年八月廿五日・同三年七月日・四年八月廿三日、三箇度洪水、本庄之内狭少之地、弥崩失、柚工等無居住之地、若被停止出居之庄民者、何廻跡、勤仕本寺之役哉¹²」とあることから、大国と同じ保安二年八月二十五日の洪水、および翌年・翌々年の夏にも洪水を経験していることがわかる。ここで重要なのは、柚住人たちが被害状況を訴えるとともに、そのことを理由として、他地域への出作行為の認可を得ようとしている点である。当該期の莊園や柚などの住人たちは、災害に遭った時、さまざまな論理を駆使しながら、領主から復興支援（年貢免除や復興費用の給付、出作行為の許可など）を獲得しようとしているのである。ここに、当該期における水害という天災を、単なる困難として終わらせることなく、それを逆手にとって領主と交渉を行い、あるいは諸種の課役免除を得ようとする人々の主体性を看取することができよう。すなわち、当初は年貢収取のための単位として設定された莊園や柚が、在地社会（地域社会）において独自の規律と論理をもって動き始めているのである。

第二節 洪水による河道変化がもたらす境界紛争

洪水は莊園の領域を変化させることもある。このような事態は東西南北を確定する「四至」によって、その空間領域

を決定している荘園にとって、大きな影響を与える問題であった。永治元年（一一四二）十月二十九日、美濃国厚見郡茜部¹³の領主である東大寺が、茜部の隣莊市橋莊内にある内牧莊（郷）の領主仁和寺大教院¹⁴に対して一通の文書（牒）を送った¹⁵。冒頭には「欲^レ被^下且任^二官符宣^一旨、如旧返入、且為^二弘法興隆、依恩免除^上、為^二院領字内牧莊^一所^レ被^二割取^一寺領、字茜部庄四至榜示内治田并敷地合拾貳町伍段」とあり、内牧莊（郷）が茜部莊から割き取った治田（開墾田）および敷地一二町五反の返却を求めるものであった。ここで訴えられている市橋莊は、十二世紀初頭から確認される仁和寺領莊園で、六つの郷からなっていたことが分かっている¹⁶。そのうちの一つが内牧莊（郷）で、友河を挟んで茜部莊の東に位置する郷であった。ちなみに、市橋莊の遺称地と考えられる現在の市橋地域は、茜部莊から見ると西北に位置している。つまり市橋莊は一円の領域を持った荘園ではなく、所在を異にする複数の郷を含みこんで成立していたものと考えられるのである。茜部・市橋両莊園の近隣には長講堂領平田莊もあるが、ここもまた散在する複数の郷をもつ一つの莊園をなしている。また、当地の地形環境として特徴的なことを挙げると、境川・荒田川という二つの河川が茜部・市橋両地域を横断するように流れ、西に向かって長良川に合流している。さらに、西南方では西から流れてきた木曽川が大きく湾曲して南へ方向を変えており、氾濫の発生しやすいことが推測できる。こうした環境は地域秩序や領域のあり方にも変化をもたらすものであり、ここで取り上げる相論もその一齣である。

この争いは東大寺側が主張する「今秋洪水如^レ無^三余剩^一¹⁷」という記述から、境界にあたる友河が洪水を引き起こし、境界の不明明になったことにより惹起された事件であったことが分かる。東大寺の牒によれば、茜部莊の四至（四方の境界）は「東限友河 南限尾張河 西限平田大路并高樺 北限朴垣并小厚見小路¹⁸」とあって、東境の友河を超えて内牧莊側が土地を領有しているというのである。これに対して、内牧郷が所属する市橋莊の住人らは反論を次のように展開した。

美濃国有^二友河^一、以^二件河^一為^二市橋御庄之西堺^一、以^二件河^一為^二東大寺御領茜部御庄之東堺^一、然則本公驗云、以^二友河^一為^二西堺^一、又東大寺御庄以^二友河^一為^二東堺^一者、而先年之比洪水之時、友河之手指^二御庄之中心^一、流通畢、隔^二本堺河^一之事十餘町許也、其榜示顯然也、然而土民依^レ知^二子細^一、全不^レ成^二異論^一、任^二本四至^一、所^レ弁^二來御年貢^一也、爰今年背^二往代之例^一、付^下以^二友河^一為^二東堺^一之詞^上、越^二來當御庄内^一十餘町、所^レ擬^二押取^一也、巧^二謀計^一之条、言語不^レ及事也、¹⁹

市橋莊住人によれば、友河を境として西が茜部莊、東が市橋莊（内牧郷）であるのは疑いのない事実である。ただし、先年の洪水の時に、友河の水が「御庄」内牧郷の「中心」を指して流れてきたとしている。つまり、洪水によって友河の流路が変化し、元の境界をなしていた流路から、十余町分ばかり内牧側（東側）に食い込んできたのであって、東大寺側が主張する一二町五反は、もともと内牧郷に属する地であるというのである。これがこの争いにおける最大の争点であった。両者が主張するところの実否について現在判断することはできないが、仮に市橋莊住人たちの主張が事実であったとすれば、友河を東境とするという文言を巧みに東大寺側が利用したと見るべきであろう。自然環境の変化はどの時代においても起りうるものであるが、友河を境とするという言葉によって四至が確定され、その四至によって莊園の領域が規定されるという莊園制社会にあっては、流路変化は単なる環境変化ですまされる問題ではなかった。境界が変化することは、住人たちの居住空間も変化し、再生産の基盤たる耕地面積も変化するのであり、莊園という枠組みの中に帰属する人々の日常生活に深刻な影響をもたらすのである。それは当然、現地のみではなく、莊園領主の経済にも影響を及ぼしたはずである。

ちなみに、市橋莊の訴えでは、変化した流路に四至の文言解釈を宛てて茜部莊民らが越境押領してきたと記されているが、別の文書を見ると、茜部莊が美濃国衙領（公領）との間で、逆に莊域を侵食されるという事態も起こっていたことが分かる。その文書には「御庄建立以降数百歳間、件大河随^レ類寄^二庄方^一、於^二旧河跡^一者漸漸雖^レ成^二桑原^一、至于往古河^一



図1 茜部庄周辺図（明治24年測図陸地測量部地図に加筆）

者尚以見在也、以_二旧河与新流之中河成桑原_一者、号_二河成国領_一為_二尾_{（張脱カ）}国分_一也、年来雖懷_レ愁、不_レ能_二沙汰_一之間、近年度頻有_二大洪水_一、御公驗内九条在家敷地等也、以_二流失_一御年貢絹綿、無_レ力_二弁済_一、早限_二旧河跡_一、於_二河成地_一者、如_レ旧可_レ被_レ返_二入庄内_一也²⁰⁾とある。これは、茜部荘の南境にあたる大河_二尾張川_一（木曾川のことであるが、当時の流路は現在の境川にあたる_二とされる_一）の流路が変化し、茜部荘側に河道が迫ってきたことが原因で、河成（洪水によって土砂が流出して荒地になること）となった茜部荘内の土地を国衛に収公（没収）されたことを記したものである。つまり、茜部荘と市橋荘の間で発生した境界問題と同じような状況が、国衛領と茜部荘との間でも発生していたということである。この事件は河川流路の変化がいかに大きな問題を発生させたのかを物語っている²¹⁾。なお、この相論では東大寺・仁和寺大教院それぞれの領主を介した論争が展開されている。しかし、あくまでも主体が現地における当事者たる住人たちであることを忘れてはいけない。

第二章 築堤・開発と荘園

第一節 築堤とその影響

洪水などの自然災害以外に、河川流路の変動や地形の変化をもたらす契機として、人為的な開発がある。ここでは、治水・利水に関わる開発がもたらす正負両側面の問題について見ていきたい。

まず取り上げるのは備前国和気郡香登荘の事例である。香登荘は現在の岡山県東部を南流し、瀬戸内海に注ぐ吉井川（和気川）の流域（左岸）に位置する荘園で『和名類聚抄』の「香止郷」を前身とする。山地を流れてきた吉井川が平野部に入る地点に所在する当地は吉井川の氾濫源でもあった。この事情を示す当時の史料によると「久安年中之比、当国往古公領之井口、依_二洪水_一損失之上、国領作田多以損亡、因_レ茲自_二国衛_一香登庄傍築_二大堤_一畢²²⁾」とあって、久安年間（一

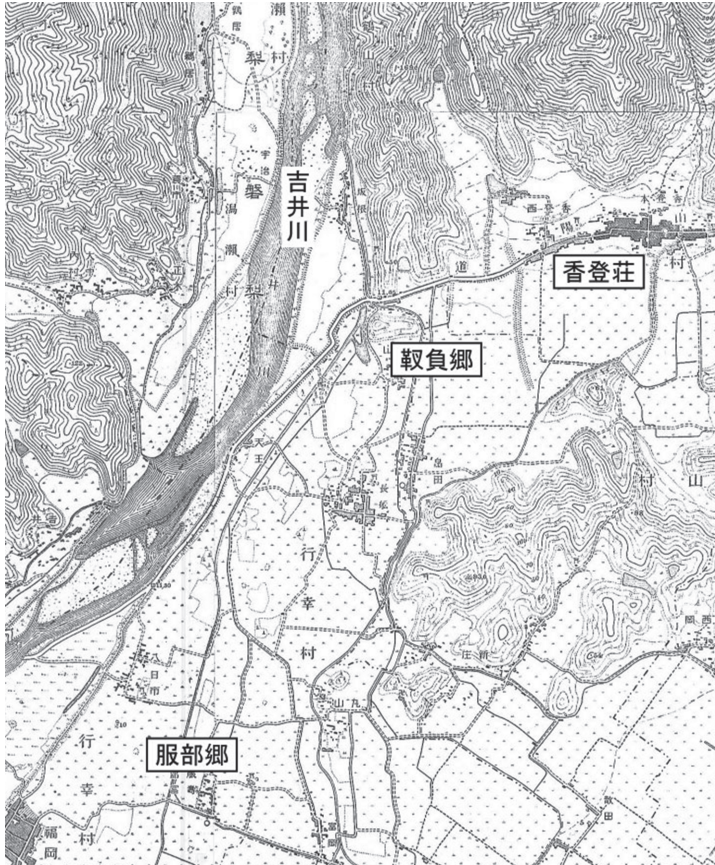


図2 香登荘周辺図（明治28年測図陸地測量部地図に加筆）

一四五～五〇）に公領（備前国領）の井口（用水取水口）が洪水によって決壊し、公領の田地が水損被害を受けたため、備前国衛の在庁官人らが氾濫源である香登荘の傍に大規模な堤防を築いたことが分かる。在庁官人らにとって、あるいは国衛領の住人にとっては治水政策の一環だったのであろう。ところが、このことが思わぬ問題を引き起こすことになった。「依二件堤一当庄之内、又如二国領一洪水宛満、庄作田多以損失」と記されるように、今度はこの堤防が原因となって洪水の時に香登荘が被害をこうむるようになったのである。おそらく大雨で河川水位が堤防の高さを超え、香登荘内に流入したのであろう。しかも、堤防があるために流

入した水が捌けなくなってしまうものと推測される。この状況を受け、領主にあたる鳥羽院庁は、久安二年（一一四六）備前国在庁官人等に対して次のような命令を下した。

院庁下 備前国在庁官人等

可_レ使者相共_ニ実_ニ檢四至内池成坪_一、以_ニ工田_一⁽⁵⁾加入其代、令_ニ滿_ニ本数_一香登御庄田事、
使公文修理少属伴兼光

右、香登御庄者、天養二年四月 日解状云、当御庄者、東河東側也、而奥郡田千餘町為_ニ養耕_一、字今堤奇_ニ先跡地_一⁽⁶⁾、始新堀寄_ニ当御庄之方_一、被_レ築_ニ高堤_一、因_レ茲為_ニ洪水_一、四十餘町已成_レ池朽損、仍本数田不足、随去康治二年、申_ニ請御使実檢_一注先畢、不_レ被_ニ入_ニ替件池成代_一者、以_レ何所出可_レ進_ニ濟御年貢_一哉、但任_ニ傍例_一、依_レ為_ニ庄近辺_一、服部郷田被_ニ加入_一者、尤可_レ為_ニ便宜_一歟者、任_ニ申請_一、使者相共_ニ実_ニ檢池成坪_一、点_ニ入便宜公田_一、可_レ立_ニ券注進_一之状、所_レ仰如_レ件、在庁官人等宜_下承知、不_上可_ニ違失_一、故下、

久安二年五月 日 主典代主計權助兼因幡權介皇后宮大属大江朝臣 在判

別当權大納言藤原朝臣 在判

民部卿藤原朝臣 在判

權中納言兼左衛門督藤原朝臣

内藏頭兼伊豫守皇后宮亮藤原朝臣 在判

播磨守兼右京大夫平朝臣 在判

伯耆守藤原朝臣

左馬頭兼讃岐守藤原朝臣 在判

出雲守藤原朝臣²⁴

これによれば、香登荘の水損面積は四〇余町にも及んでおり、「成^レ池朽損（池と成り朽損す）」という状態であった。そこで院庁は使者を現地に遣わし、国衙在庁官人らと共に検分させた上で、水損分に相当する代替地を公領から割り当てて、本田数の不足を補うよう命じたのである。具体的には香登荘の南に位置する服部郷・靱負郷（いずれも『和名類聚抄』に郷名が確認される）という二箇所の公領田を替地として香登荘に繰り入れさせるというものであった。最終的には服部・靱負両郷の内から、水損地の約半分にあたる二〇町八反を香登荘に割り当てるということで決着をみた。

この事例を見て分かるように、国衙在庁官人による築堤という治水政策が、堤防構築地の近傍地域においては逆に災害を引き起こす要因ともなったのである。また、京都から院庁の使者が現地に赴き、在庁官人と共に実地検分を行ったうえで、公領の土地を替地として充当するという複雑な手続きを必要としたのには、荘園と公領との拮抗という中世前期特有の状況も大きく影響していると考えられる。そしてこのことは、地域秩序を変化させることにもつながる問題である。公領あるいは領主を異にする荘園がそれぞれに一定の地域秩序をもち、そこに生活基盤を置く人々も「庄民」意識を抱くようになっていくこの段階において、公領の一部を割きとって、別の荘園に組み込むということは、それまでの地域秩序や、人々の帰属意識に大きな変化を否定なく迫るものであつたろう。このように、自然災害や人為的な治水・利水の営みなどは、社会構造のあり方にもさまざまな影響を与えるのである。

なお、この時池成となった水損田地は、数十年後の文治六年（一一九〇）になって、再開発が企てられることになる。

八条院庁下 備前国香登御庄

可^三早令^二耕作^一池成田肆拾町事

右、得_二去_一二月日菩提院三綱等解状_二一_レ稱、当庄近年以来旱魃洪水之愁、逐年無_レ絶之間、年貢多未進、寺用既不足也、因_レ之人供動減少、衆僧常含_レ愁、而當庄内有_二多田代、号_レ之池成、四十余町、且加_二寺家力_一、且励_二庄民等_一、能_二治件田冊余町_一、以_二彼所出地利_一、宛_二置寺用不足_一、長為_二衆僧供料者_一、任_二申請_一、可_レ加_二能治_一也、但以_二件所當_一、且支_二寺用之闕乏_一、且可_レ加_二加_一寺家之修理_二之状、所_レ仰_{（和件取方）}以下、

文治六年三月一日

主典代三位大江朝臣 在判

別當 朝臣

丹後守藤原朝臣 在判₂₅

これは八条院庁から下されたものである。十二世紀末の段階には旱ばつ・洪水などの天災が頻発し、年貢の収納量が大幅に減少していた様子が窺える。年貢納入率の低下を歎いた当時の領主である高野山菩提心院がさらに上位の領主である八条院に窮状を訴えたことに対して出されたのである。年貢減少という事態を前に八条院庁が目をつけたのが池成地であった。その面積が四十町と記されていることから、久安年間に国衙の堤防が原因で水損被害を受けた土地であることは疑いない。これを八条院庁は「多くの田代有り」と表現しており、「田代」すなわち水田化を前提とした耕作予定地_二水田化すること_一が可能な地と捉えていたことが分かる。それまで開発がなされなかったのは、公領の服部・靱負両郷より代替地を割き取っていたため、再開発すると再び公領に戻さなければならないという理由があったのかもしれないが、この段階に至ってはもはや猶予はなく、池成地の再開発という手段を取ることにしたものと考えられるのである。

第二節 鴨祐季の築堤開発計画

香登荘の場合、水害を防ぐための築堤が逆に田地水損という事態を招いたという事例であったが、基本的に築堤そのものは治水目的で行われるものである。では本稿で扱う十二世紀の段階で、築堤などの治水は誰によって担われていたのであろうか。香登荘は国衙在庁官人らが主導したものであったが、他の事例を確認しておきたい。

摂津国河辺郡猪名荘の場合をしてみる。猪名荘は古く天平勝宝六年（七五四）、孝謙天皇が東大寺に施入したことから始まる荘園であるが、当地の南端に位置する長洲浜の住人たちが、長洲浜を藤原敏子（後冷泉天皇皇后）家の散所²⁶として寄進し、身分特権を得て、東大寺からの課役や、検非違使庁役を逃れようとするなど、猪名荘からの独立を図ろうとする動向のあったことが知られている。長洲浜はのちに所領相博（交換）によって、領主が山城の鴨御祖社（下鴨神社）へと移り、応徳元年（一〇八四）には鴨社領長洲御厨として独立した²⁷。御厨となったことによって、長洲浜の住人たちは鴨社への魚介類貢納義務を負うかわりに、諸役の免除や営業特権を手に入れたものと考えられる。この長洲御厨を基盤に経営を展開しようとした鴨社の禰宜鴨祐季は承安五年（一一七五）次のような申請を東大寺に対して出した。

鴨御祖社禰宜鴨県主祐季

申請東大寺御領摂津国猪名御庄内江、欲_レ築_レ堤開_レ田

子細事、

在_レ沓_レ処 東限小河 西限沢毛 南限大物 北限江

右件江、有_二当社御領長洲御厨最中、潮出入之跡也、而可_レ有_二開田便宜、可_レ有_二築堤功勞、其堤加_二檢知_一之_レ処、殆及_二廿町_一、仍以_二祐季私能米參伯斛_一、欲_レ遂_二其功_一者、若遂_二得件開發者、毎年地子能米段別伍升 猪名御庄斗定可_レ弁_二寺家_一、其外偏為_二祐季進退_一矣、但於_二作人_一者、皆是長洲御厨供祭人、免_二雜事於其身_一、令_レ成_二供祭調進之勇_一、為_二寺家_一無_レ損、為_二社家_一至要、旁非_レ無_二其益_一、抑至_二領主職_一者、祐季子子孫孫可_二知行_一者、為_レ備_二後代之証文_一、欲_レ

給「預寺家御下文」而已、仍勒_レ狀、所「申請」如_レ件、

承安五年正月十六日 禰宜鴨県主（花押）²⁸

祐季は長洲御厨内における築堤と田地開発の申請を行ったのであるが、その場所は冒頭の在所表記にあるように、東に小河、西に沢、南は大物浜で、北に江があるという地である。この開発は、東大寺領にもかかるものであったために、わざわざ東大寺に申請するという形式をとったのであろう。なお、開発対象となった「江」について大山喬平氏は、大物浜の形成によって、その背後に取り残された沼沢地であったとしている²⁹。また「潮出入之跡也」という記述から、潮位が高くなれば海（現在の大阪湾）から潮水が流入してくるいわゆる塩入荒野の地であったことが推測される。鴨社の御厨であるという本来の長洲浜の性格からすれば、鴨社に献納するための魚介類を確保するための地であればよいが、ここに祐季は耕地開発を企てたのである。祐季はそのために塩入を防ぐ堤防工事が必要であると考え、築堤工事の規模を見積もった。その結果、この計画を実現するために必要な堤防は二〇町（約2km）近くにわたることとなった。この時、祐季は長大な堤防を「私能米參百斛」すなわち、私費を投じて築堤することを申し出た。そして完成した暁には毎年反別五升の地子（地代）を東大寺に納入することを約束したのである。無論、祐季自身も得点を確保することが前提である。まず、一反あたり五升の地子以外の收穫は全て祐季の得点とすること、そして新開田の作人は長洲御厨の供祭人、すなわち鴨社に魚介などの神饌を献納することで諸役免除などの特権を得ている人々に割り当てるといのである。この直後、八月（改元して安元元年）に祐季は延暦寺衆徒との紛争が原因で禰宜職を解任されたため、この計画は実行されなかったものと思われるが、これだけの規模の塩入荒野開発を、国衙在庁など国の主導ではなく個人の資力をもって行おうとする動向が見られるようになってきていることは、当時の治水・利水技術の進展と、開発の大規模化という動きと関連して重要な問題であると考ええる。そして、この開発計画が東大寺・祐季という領主層にとってのみ利益をもたらすの

ではなく、耕作権を長洲御厨の住人（供祭人）も獲得するという点が重要である。この時期における大規模な開発とは、現地住人たちの開発要求が大前提としてあり、それを受けることのできる私力を持った領主層が応えることによって実現されていたのである。

第三節 開発主体者の性格

先にも触れたように、木村茂光氏は、当該期の開発を領主層・農民層双方の協同によって成り立っていたとする見解を提起している。³⁰ 鴨祐季などはまさに領主層にあつて、農民からの要求の上に大規模築堤を企てた人物である。ここでは、こうした開発に携わった領主層がいかなる性格を持っていたのかについて、紀伊国紀ノ川下流域の再開発事例から検討を加えたい。

紀実俊謹解 申請 国裁事

請_レ被_下蒙_二 国恩_一、裁免_上直川保河南島久重名内松門名

畠本作棄作一町餘・開発一町餘・常荒二町餘并五町、且依_レ為_二四隣牛馬放喰地_一、且依_レ為_二洪水深底朽損地_一、備_二永代証験_一、殊為_レ存_二国益_一、被_レ免_二除萬雜公事_一、所当税代麦并済段別無利二斗代_一、而弥致_二荒野開發_一、追年取_二進梶取返抄_一、子細愁状、

右、謹檢_二案内_一、五畿七道之習、諸国庄公之例、荒野者雖_二千町_一無益也、開作者雖_二一段_一有利者也、然件河南島畠者、依_レ為_二離島_一人跡希通地也、然則自_二往古_一以来、東則田井田屋、南則栗栖湯橋、西則紀三所神宮、北則藺部六十谷、為_二如此等四隣村村庄牛馬_一、被_二喰損_一、且又為_二洪水深底水損第一_一、不中用地之故、所_レ作地利有名無実也、然故成実朝臣為_二村刀禰_一之時、為_レ存_二国益_一、相_二語合壁神宮岡前等之住民_一、雖_レ致_二耕作_一、依_二所当公事難_レ堪_一、或作人

者聞_レ懲所_二当天、乍_二作毛_一棄_レ捨之、或作人者見_レ懲雜役_二天、雖_二慰誘_一不_レ作_レ之、依_レ之島島自為_二荒廢地_一、国損甚顯然也、爰紀実俊且為_レ恐_二国威_一、且為_レ思_二相伝_一、擬_レ耕_二作件島_一之處、當時刀禰紀範成、依_二所_二当公役難_一堪、可_レ放_レ名之由、内内歎申之条、道理顯然之故、罷_二蒙憲恩_一、為_レ存_二国益_一、乍_レ恐所_レ言_二上子細_一也、寔荒野与開發、於_二所_二当之有無_一、豈无_二御憲察_一哉、加_レ之一任之善政者、萬代之美名也、何無_二国裁_一哉、望_二請国恩_一、早垂_二御還迹_一、件河南島島内松門名棄作本作開發常荒等合伍町島、殊為_レ例_レ存_二国益_一、弥致_二開發_一、限_二於永代_一、停止萬雜公事、追年并濟段別无利式斗税代表、而可_レ取_二進梶取返抄_一之由、被_二裁下給_一者、弥仰_二正道之国恩_一、倍_二勤開發之所_二当_一耳、仍勒_二在狀_一言上、以解、

承安肆年十二月 日 紀実俊 申文

裏書二

下留守所

於_二新作島_一者、可_レ弁_二濟無利式斗代_一、於_二古作者_一、任_二先例_一可_レ隨_二国役_一也、
判₃₁

これは承安四年（一一七四）、紀実俊なる人物が直川保河南島重久名内松門名の再開發許可を紀伊国衙から得るために提出した解（上申文書）である。直川保は紀ノ川河口部に位置しており、『和名類聚抄』に見られる「直川郷」を前身としている。ここで再開發の対象となった松門名は、「河南島」や「離島」という言葉が示すように、氾濫源地帯にできた島であつたことが分かる。実俊が開發申請したのは、その島の島（本作・不作を合わせた）一町余、開發一町余、そして常荒地二町余、あわせて五町である。ここは近隣村落の牛馬放牧地として利用されると同時に、洪水によって朽損しがちな土地であつた。すでに、実俊以前、村刀禰の成実朝臣なる人物が近隣郷村の人々を動員して再開發に着手していた

が、開発地に課せられた税（所当公事）が重かったために、作人たちが耕作を放棄してしまったという過去があり、実俊が再着手を試みたのである。実俊はこの申請にあたって、開発が「国益」につながることを繰り返し説き、収穫のうち反別二斗の麦を国衙に納入することを約している。勿論、それ以外は実俊の得分になるという条件である。この申請を紀伊国衙は許可し、「件畠令開_三発荒野、為_三松門別名_一、所当税代麦式斗令_三納下_一、至_三萬雑公事并保司役_一、可_三免除_一之由、国判顯然也、仍加_三在庁与判_一矣₃₂」という文言を実俊の解に書き加え、国衙在庁らが署判を加えている。これによって、実俊の開発地は「松門別名」として成立することになったのである。この後、松門別名の経営は紆余曲折を経ながらも継続し、実俊の子孫である栗栖氏の所領として存続していくことになる。

ここで、再開発を主導した紀実俊および成実について検討しておきたい。実俊に先立って当地の再開発に着手した成実は「実」という通字から、実俊の父祖であると考えられる。また、解状によれば、彼は「村刀禰」であったと記されている。中世における刀禰に関して研究した錦昭江氏は、「村刀禰」が古代においては在地（地域）における祭祀権を有し、国衙支配下にあつて「立券等の保証行為を」行う存在であり、中世になると村落規模での開発の担い手₃₃「荒野開発の中核」であったとしている。錦氏の言うとおり、成実・実俊らは村に基盤を置きつつ、開発を担ったのである。実俊の解にもあるように、成実は、近隣村落である神宮・岡前の住人をあい語らつて開発にあたつたとされている。この開発もまた領主側の意図だけでなく、住人（農民）たちの要求を基盤においてなされた事業だったのである。

ただし、ここで注意すべきは成実には刀禰以外にもう一つの顔があつたということである。成実と目される人物を探すと、長承二年（一一三三）、高野山大伝法院領荘園の官物などを免除する申請を行った紀伊国在庁官人解案₃₄に、名を連ねている人物として、「散位紀朝臣成実」がいる。また応保二年（一一六二）、高野山領荘園荒川荘（紀伊国那賀郡）に国衙の軍勢が乱入した際、国衙勢の濫妨を停止することを東寺（高野山の本寺）が求めた文書に、国衙軍を引率した者として、国司源為長・目代為貞とともに「在庁成実」の名が見えている₃₅。時期から考えても、この人物が実俊の父祖である成実

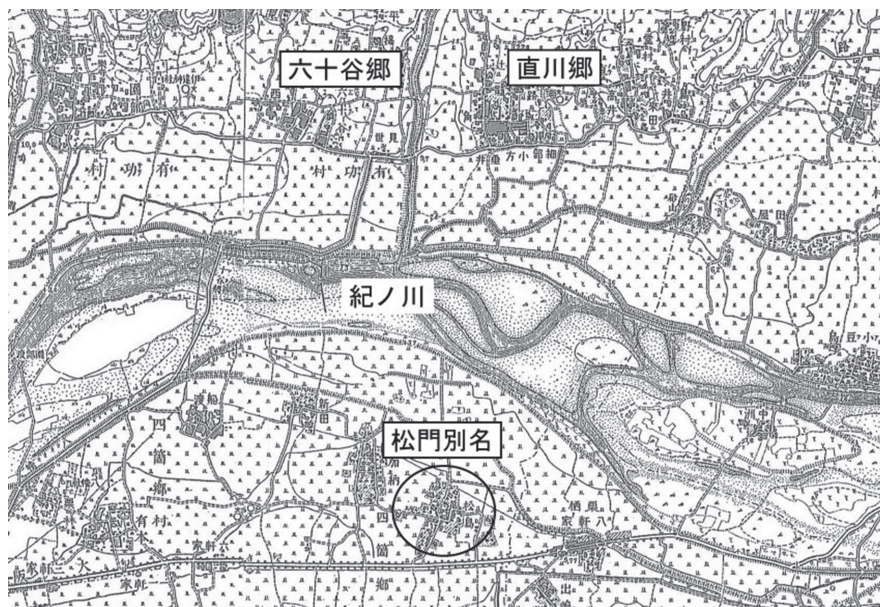


図3 松門別名周辺図（明治43年測図陸地測量部地図に加筆）

と同一である可能性は高いと考えられる。東寺の訴えによれば、国司の源為長が成実をはじめ、数百人の軍兵を率いて荒川荘に乱入し、物を奪取するとともに、堂舎や民家を焼き討ちしたという。国司・目代とともに実名が載せられているということから推して、おそらく成実は国衙在庁の中でも中心的な立場にあったものと思われる。以上のことから、紀成実は国衙在庁の有力者であると同時に、在地社会にあつては村の主導者たる村刀禰であるという二つの顔をあわせ持っていたことが明らかとなるのである。鴨祐季もそうであつたが、紀成実・実俊のような国衙在庁もまた当該期の開発を主導した階層の一つだったのである。

ところで、時期はかなり遡るが、九世紀半ばの貞観三年（八六二）に直川郷の墾田が売買されたことを示す文書が残されている³⁶。売買されたのは直川郷酒部村にある墾田で、神門今子・橘朝臣常子らが、紀朝臣門成とその蔭孫氏成に直稻二〇三〇束で売却したものである。買人である紀門成は「右京三条四坊戸主従八位上紀朝臣門成」と記されており、京都に籍を置いていた人物である。彼

はこれ以外に承和十二年（八四五）にも、紀伊国那賀郡山前郷に土地を取得しており、紀伊国内に土地を集積した一族であることが分かる。ここではあくまで推測の域を出ないが、門成の紀朝臣家が紀成実・実俊につながる可能性は十分にあると思われる。紀伊に土地集積をしていることから見ても門成一族の本貫地は紀伊であろうから、彼らが中世初期段階に本貫地において経営の重点を置くようになっていった様相を窺うことができよう。

おわりに

以上、本稿では十二世紀における治水・利水という側面から当該期における地域社会の特質を検討してきた。ここで明らかにしたことを以下にまとめておく。第一には、古代末以降の社会に大きな規定性を与えた荘園制が、特に十二世紀段階で見ると単なる権門領主の収取システムではなく、地域において独自の秩序と領域をもち、住人たちもその枠組みに強固な帰属意識を抱くようになっていくというものである。第二に、とりわけ水害などの天災や、それに対応する治水、そして農業経営を安定させるための利水といった営みの側面において、共同体意識が鮮明に発揮されることも見えてきた。「○○荘」という領域への帰属意識が稀薄であれば、起こらなかったであろう境界紛争が頻発するものもそのためである。そして、これが中世後期に至っても地域社会における村落間紛争の中心となつて続いていくのである。第三に、十二世紀にしばしば見られる大規模な築堤・開発などが、荘園・村落の住人と領主双方の意思が合致するところで行われている事例のあることを確認した。

本稿で見てきた大国荘における洪水被害からの復興活動、自然災害と環境変化を契機とする西部・市橋両荘園の相論、紀ノ川下流域における松門別名の再開発などから、地域社会に根を降ろした人々の主体的な動向が見えてくる。いずれの事象も権門たる荘園領主を巻き込みながら展開しており、一見すれば権門の支配権に関わる問題として片付けることもできそうである。しかし、それぞれの訴えや行動を丹念に跡づけると、現地に生活基盤を置く人々の意思がまぎれも

なくそれらの事象の基底にあることが見えてくる。十二世紀はその意味で荘園という領域が地域共同体の一つのあり方として定着し、そこに住む人々の帰属意識の高まりとともに、中世社会の基礎を形成した世紀であったと言える。まだまだ事例も多く、論じなければならない点も多々あるが、それらについては今後の課題としたい。

付記

本稿は、二〇一二年度、大谷大学真宗総合研究所の個人研究（一般研究）助成を得て行った「日本中世の治水・利水に関する史料的研究」の成果をもとにまとめたものである。

注

- 1 寶月圭吾『中世灌漑史の研究』（畝傍書房、一九四三年）。
- 2 黒田日出男『日本中世開発史の研究』（校倉書房、一九八四年）。
- 3 木村茂光『大開墾時代の開発』（同『日本古代・中世島作史の研究』第二部第一章、校倉書房、一九九二年、初出一九八二年）。
- 4 『神宮雜例集』（『群書類従』神祇部第一輯）「天平賀事」によれば「八月廿五日夜、洪水、外宮正殿下深二尺湛入」とあり、被害の大きさが窺える。
- 5 大山喬平「中世における灌漑と開発の労働編成」（同『日本中世農村史の研究』岩波書店、一九七八年）。
- 6 水野章二「中世の水害と荘園制」（遠藤ゆり子・蔵持重裕・田村憲美編『再考中世荘園制』岩田書院、二〇〇七年）。
- 7 保安二年九月二十三日 伊勢国大國莊流失田島注進狀（白河本東寺百合文書）八十一、『平安遺文』一九二三号）。
- 8 大治元年閏十月二十日 伊勢国大國莊損得注文（『東寺百合文書』ひ、『平安遺文』二〇八六号）。
- 9 ここに名を連ねたなかの神官層について、在地領主としての顔もあわせ持っていたことが前田徹氏によって指摘されている（二〇一三年七月二十八日に早稲田大学において開催された「荘園・村落史シンポジウム」における同氏の報告「中世初期の地域社会―東寺領伊勢国大國莊とその周辺―」）。

- 10 保安三年正月二十日 伊勢国大田庄田堵等解（『東寺百合文書』一、『平安遺文』一九五〇号）。
- 11 水野氏によれば、これら現地からの復興費用要求に対し、東寺は荘園財政以上の支出をしなかったとされる（前掲註6水野論文）。
- 12 保安五年二月二十九日 伊賀国黒田柚司等解（『中村雅真氏所藏文書』、『平安遺文』二〇〇七号）。
- 13 西部荘は、もと桓武天皇の勅旨田であつたが、桓武天皇皇女朝原内親王の遺言によつて東大寺学僧百人の衣服料所として、施入された莊園である（『岐阜県地名』平凡社歴史地名大系、平凡社、一九八九年）。
- 14 仁和寺大教院は、仁和寺に入寺した後三条天皇皇女の聡子内親王が建立した院家である。聡子内親王は「一品宮」と称された。
- 15 永治元年十月二十九日 東大寺牒案（『東大寺文書』四ノ十三、『平安遺文』二四五二号）。
- 16 永治元年十二月 日 美濃国市橋荘住人陳状案（『東大寺文書』四ノ十三、『平安遺文』二四五四号）に、「二町五段事、右謹検案内、件大教院御領市橋庄ハ六郷也、其領地合三百餘町之中ニ、実之内牧郷八十町許也」とあることから、市橋荘が六郷から成り、内牧郷がその一郷であつたことが分かる。
- 17 前掲註15永治元年十月二十九日 東大寺牒案。
- 18 前掲註15永治元年十月二十九日 東大寺牒案。
- 19 永治元年十二月 日 美濃国市橋荘住人陳状案（『東大寺文書』四ノ十三、『平安遺文』二四五四号）。
- 20 永治二年十月 日 美濃国西部荘住人申文案（『東大寺文書』四ノ十三、『平安遺文』二四六九号）。
- 21 なお、この文書にある「桑原」に着目した木村茂光氏は、旧流路の開発が農民層によつて主体的に行われていたことを指摘している（前掲註3木村論文）。つまり洪水などによつて荒廢した土地は再開発の対象であり、そこから新たな利益を生み出すものであつたということである。そして、国衙は四至の論理をもつてその用益地を収公（没収）するといふ行爲に出たのである。
- 22 長寛三年七月四日 太政官牒案（『根来要書』、『平安遺文』三三五三号）。
- 23 長寛三年七月四日 太政官牒案（『根来要書』、『平安遺文』三三五三号）。
- 24 久安二年五月日 鳥羽院庁下文案（『根来要書』上、『平安遺文』二五七七号）。
- 25 文治六年三月一日 八条院昀子内親王庁下文（『根来要書』、『鎌倉遺文』四二九九号）。
- 26 ここでの「散所」は、貴族や杜寺に人身的に属し勞役を負うことと引き換えに年貢免除の特権を受けた人々が居住する地を指す。この事情については「東大寺東南院文書」の史料に次のように記されている。「今在家殆及三千家、田地已是多町、然而対_レ押（捍カ）寺役_レ遁_レ避官物、其故者、伴住人卅餘人、往年不_レ令知_レ寺家、雖_レ入_レ小野故皇太后宮職（藤原欲子）之散所、依_レ不_レ闕寺

- 役、不_レ致_二其沙汰_一之間、鴨御祖社司惟季申_二請彼職家、以小野辺領地八町、所_レ相_二博件散所_一也_一（応保二年五月一日 官宣旨案「東南院文書」五ノ十三、「平安遺文」三二一三三號）。
- 28 承安五年正月十六日 鴨御祖社禰宜鴨祐季申狀（「百卷本東大寺文書」十三号、「平安遺文」三六七二号）。
- 29 前掲註5大山論文。
- 30 前掲註3木村論文。
- 31 承安四年十二月 日 紀伊国紀実俊申文（「紀伊統風土記」附録一、「栗栖氏文書」、「平安遺文」三六七〇号）。
- 32 承安四年十二月 日 紀伊国紀実俊申文（「紀伊統風土記」附録一、「栗栖氏文書」、「平安遺文」三六七一号）。
- 33 錦昭江「中世刀禰研究の前提」（同『刀禰と中世村落』第一部第一章第二節、校倉書房、二〇〇二年、初出一九九六年）。
- 34 長承二年十二月二十八日 紀伊国在庁官人解案（「根来要書」下、「平安遺文」補二一四号）。
- 35 応保二年十一月 東寺門徒申狀案（「高野山文書」又統宝簡集百十一、「平安遺文」三三三六号）。
- 36 貞観三年二月二十五日 紀伊国直川郷壘田売券（「神宮文庫文書」、「平安遺文」一三〇号）。
- 37 承和十二年十二月五日 紀伊国那賀郡司解（「東寺古文書」、「平安遺文」七九号）。

